Asian Breeze

No. 81
November
2017

エイジアン・ブリーズ81号　平成29(2017)年11月発行　年3回発行

行政官のためのジェンダー主流化政策2017(第1回)の研修員たち(北九州市立大学)

いま、女性たちは……p. 1

コソボ、その過去と未来
── 平和維持の使命と民主主義の構築

コソボ共和国首相府ジェンダー平等局 最高執行官　エディ・グシア

誌上セミナー……p. 2

持続可能な開発目標(SDGs)とジェンダー(第2回)

国連開発計画(UNDP)駐日代表　近藤 哲生

特集……pp. 3-11

2017GSWポストカンファレンスin北九州
　～明日のキャリアを見つけよう!～
行政官のためのジェンダー主流化政策2017(第1回)
KFAW第27期海外通信員がスタート　ほか

KFAW

いま、女性たちは

コソボ、その過去と未来
ー平和維持の使命と民主主義の構築

コソボ共和国首相府
ジェンダー平等局　最高執行官
エディ・グシア

2017年６月、日本の独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する「行政官のためのジェンダー主流化政策」研修プログラムに参加させていただきました。日本はこれまで18年間、コソボにおける政府組織や民主主義の構築とその強化、および経済発展に貢献してくれた国です。その日本に滞在中、ジェンダー平等の発展と達成、さらにそれを持続可能にするには、経済や政治の安定だけでは不十分であることに気付きました。日本の女性活動家たちに会い、彼女たちの長年の努力の歴史や直面している課題を学び、他国からの参加者と討議を重ねていく中で、ジェンダー平等への道のりは長く厳しく、一筋縄では行かないことを思い知らされました。また、ローカルな発展とグローバルな発展を切り離すことはできません。そのため、ジェンダーの平等を達成するには、ローカルかつグローバルな協力体制が求められるのです。

コソボ紛争が終結して18年になりますが、この間にコソボが築いてきたジェンダー平等の実績は、多大なる国際支援と女性の権利と人権を守る国内活動家の懸命な努力なしでは達成できなかったでしょう。現在の新政府もまた、ぜい弱ではありますが、コソボの若い男女の夢と希望をかなえるために日々奮闘努力を続けているところです。

このような国際社会の協力のおかげで、今日、コソボは、ジェンダーの平等が民主的な社会発展の基本的価値観であることを憲法上で認める国家となりました。2004年に開設されたジェンダー平等局は、政策と法律の立案およびモニタリングという明確な任務を担い、意思決定の最高執行レベルである首相府に設置されています。「ジェンダー平等に関する法」は、国民生活のあらゆる分野における男女の平等参画を定めており、平等の原則に基づいています。2008年の独立宣言から６年後の2014年、ジェンダー割当制度による初めての選挙が行われましたが、結果、女性議員が国会議席の33.33％を占めました。40名の女性議員の内15名が、割当候補（候補者リストの３番目は必ず女性にしなくてはならない）に加え、得票数により当選したのです。

アティフェテ　ヤヒヤガ氏は、コソボおよびバルカン半島諸国の歴史上、初の女性大統領になりました（2011-2016）。彼女はコソボに政治的な安定をもたらした重要な人物となり、また、コソボ紛争中の性的暴力被害者の強力な代弁者として国内外で活躍しました。

これまでのコソボにおける私たちの実績は、不断の努力、試行錯誤、また、議論の積み重ねを通して達成してきたものです。女性活動家、国内女性団体や市民社会のメンバーが、国連コソボ暫定行政ミッション（UNMIK）の平和維持活動に女性が最低限にしか関与していないことに抗議し、より多くの女性の参加を求めて圧力をかけたことを忘れてはなりません。また、コソボの平和と安全保障プロセスへの女性参画を求め、「女性・平和・安全保障に関する国連安保理決議第1325号」の実施を強く要請したのもコソボの市民社会の女性活動家たちでした。これらの努力にもかかわらず、1999年のコソボ紛争中に性的暴力の被害者となった女性たちが法的に犠牲者として認められ、この犯罪行為が国際機関の戦争犯罪調査の対象となるまでに15年を要しました。しかし今日まで、コソボのアルバニア人女性に対するこの凶悪犯罪が裁かれ、有罪判決が下された事例は一つもありません。決議を適用しないことは、決議が承認されないことよりも悪質であり、戦争の一手段であった性的暴力が今でも日々新たな犠牲者を出しているのです。

野蛮で尊厳を無視したやり方で女性が扱われることを阻止するためには、同性である女性が、もっと多く意思決定のポジションに就き積極的に活動することが必要です。私たちの生活、民主社会、文明を危うくするような悪の力は日常的に少年少女を狙っています。彼らが餌食となるのを防ぎ、警告を発するためにも、その鍵を握る女性に投資しなければなりません。

私たちの夫や兄弟、息子たちが、適切な教育で正しく育てられ、人道的な心、共感、そして必要な勇気を持つならば、彼らは、ジェンダー平等を追求する私たちの味方になると強く信じたいと思います。少年少女の未来のため、誰もが権利と自由を享受し、尊厳と平等をもって夢や希望をかなえられる暴力のない社会を目指して一緒に頑張りましょう。

Profile　エディ・グシア

現在、コソボ共和国　首相府ジェンダー平等局　最高執行官。2005年同局を支援するため、当初はコンサルタントとして採用されたが、その後コソボ政府に正式雇用され、2016年まで当局の報告監視課長を務める。ジェンダー平等のためのコソボプログラム、家庭内暴力撲滅国家戦略、女性・平和・安全保障に関する国連安保理決議第1325号の実施に関する国家行動計画等、コソボにおけるジェンダー平等を推進する重要な政策文書策定のキーパーソンである。

持続可能な開発目標（SDGs）とジェンダー（第２回）

国連開発計画（UNDP）駐日代表　近藤　哲生

Profile

米国ジョーンズ国際大学（UNDP開発アカデミー）開発学修士号取得。1981年外務省入省。在フランス大使館、在ザイール大使館、日本政府国連代表部等を経て、2001年UNDPへ出向。 2005年外務省を退職し、UNDP東ティモール人道支援調整・資金担当上級顧問、UNDPコソボ事務所常駐副代表、UNDPチャド事務所長等を歴任。2014年１月より現職。

SDGsのゴール５は、ジェンダーの平等と女性のエンパワーメントです。国連では、さまざまな機関がこの問題に取り組んでいるのと同時に、全ての機関においてジェンダー平等を活動に反映させなければならないという原則があります。

女性の人権が最も危険にさらされるのは、紛争に襲われた地域です。国連安全保障理事会は、2000年の10月にジェンダー平等および平和と開発についての決議（国連安保理決議第1325号）を採択しました。この決議の中では、一般市民、特に女性や子どもが武力紛争によって悲惨な暴力などの悲劇にあうことを懸念して紛争の予防や解決、そして平和構築のためには意思決定における女性の役割をもっと増やしていかなければならない、ということが宣言されました。決議の第10パラグラフでは、武力紛争の全ての当事者に対し、レイプなどの性的虐待から女性と少女を保護するための特別な措置を講じることを求めており、紛争下における女性の人権の保護のための当事者の責任を強調しています。

タリバンに襲撃されて辛くも一命を取り留めたパキスタンのマララ･ユフザイさんは、女性の教育の機会を奪ってはならないという主張を続けた結果、命に及ぶような暴力に見舞われました。しかし、それにたじろぐことなく、平和と女児が尊厳を持って社会に参加する権利を訴え続けています。その活動が国際的に認められ、2014年にはノーベル平和賞を史上最年少で受賞しています。

私も、コソボに勤務していた時に、国連開発計画（UNDP）によるコソボ政府の能力強化支援プロジェクトの一つとして、警察のトレーニングを行ったことがあります。それは、中・東欧地域にまん延する人身売買の被害者となった若い女性たちを保護し、矯正を支援するためのプロジェクトでした。東欧には、人身売買を資金源とするマフィアが数多く存在しており、旧ソ連諸国であったモルドバやウクライナなどから西ヨーロッパに出稼ぎに行く女性たちをだまして集め、西ヨーロッパの大都市で性的な産業に従事させて搾取する犯罪が横行していました。そしてその多くは、コソボ紛争後、まだ政府による治安維持能力が不十分なコソボが、取引の現場になっていました。コソボ警察は、そのような人身売買の被害者である女性たちを売春行為の被疑者として身柄を拘束していましたが、UNDPは女性たちが人身売買の被害者であることに十分に配慮してこのような女性たちの人権を守り、精神的な傷をケアするような取り調べの方法をコソボ警察に対して訓練しました。この女性の安全保護に関するプロジェクト（Women Safety Security Initiative: WSSI）は、私が勤務していたコソボ独立前の2007年から2010年まで続けられており、コソボの治安当局をジェンダーセンシティブな組織にし、女性への暴力に対する司法制度を整備することに成功してきました。

このように､SDGsのゴール５の達成に必要な努力は、国際機関や政府にとって特に重要です。なぜなら、一般社会の人々やさまざまなコミュニティにとって国連で採択されたジェンダー平等の原則をボトムアップによって実現することは容易ではないためです。そのため、国際機関や政府が、教育や治安の面においてしっかりとした取り組みを行うことが大切です。

先日国会で可決した性犯罪に関する刑法改正案[1]では、明治時代に制定以降、抜本的な改正が行われていなかった規定を改正しました。改正案には３つの大きな柱があります。１つ目は、「強姦罪」を「強制性交等罪」と改め、被害者に男性も含めるとしたことです。２つ目は、法定刑の下限を懲役３年から５年に引き上げ重罰化したことです。３つ目は、被害者の告訴が必要な「親告罪」の規定を削除し、「非親告罪」としたことです。

このような日本における性犯罪を取り締まる刑罰の見直しは、日本の社会がSDGsの達成を目指すうえで重要なマイルストーンであったと考えています。紛争や災害の際に、女性や女児の保護を最優先すべき課題と捉え、また特別の措置によって性暴力犯罪からの保護を手厚くするという考え方は、どのような文化・宗教的背景や経済の発展段階においても例外なく優先されるべきものだと考えています。

国際機関や政府がジェンダー平等に取り組むと同時に、国民一人ひとりが、ジェンダーに捉われず自分らしく生きることのできる社会の実現に向けて取り組んでいくことが重要です。みなさんも、ゴール５を含むSDGsの達成に向けて何ができるか､考え､行動していきませんか。

1　刑法の一部を改正する法律案（平成29年７月13日施行）、法務省 http://www.moj.go.jp/keiji1/keiji12_00140.html

2017　ＧＳＷポストカンファレンス　in 北九州

～明日のキャリアを見つけよう！～

（公財）アジア女性交流・研究フォーラム（KFAW）と北九州市は、世界の女性リーダーが集まる国際会議「Global Summit of Women（GSW）」が今年日本で初めて開催されたのを機に、「2017 ＧＳＷポストカンファレンスin北九州～明日のキャリアを見つけよう！～」を開催しました。これは、昨年のＧＳＷポーランド大会に参加した地元企業の女性たちが、「世界で活躍する女性たちの情熱を北九州市民にも伝えたい」と、東京大会の登壇者等を北九州市に招いて実現したものです。当日は、学生、働く女性、企業の管理職や経営者などさまざまな立場の人々に多数参加いただき、今後のキャリア形成やリーダーシップについて、年齢、性別や立場を超えて共に考える機会を持ちました。

日　時　平成29年5月15日（月）　15：00～19：45
場　所　ステーションホテル小倉５Ｆ　飛翔の間
参加人数　475名

プログラム

第1部　ＧＳＷ東京大会リレートーク（15：00～17：10）
【登壇者】
　マリアンヌ・オンティベロス氏（エア・アジア・フィリピン会長）
　マリリン・ジョンソン氏（元ＩＢＭ副社長）
　甲木 正子氏（㈱西日本新聞社福岡本社販売局企画開発部長）
【モデレーター】堀内 光子（KFAW理事長）

第2部　交流会＆ワークショップ（17：30～19：45）
基調講演
　小笠原 浩氏（㈱安川電機 代表取締役社長）
ワークショップ
　荒金 雅子氏（ファシリテーター）（㈱クオリア 代表取締役）

Global Summit of Women（GSW）とは？

ＧＳＷは、世界各国の女性リーダーが一堂に会し、「女性と経済」をテーマに話し合う国際会議です。1990年にカナダ･モントリオールで初めて開かれ､毎年、世界の主要都市で開催されています。2017年５月、日本で初めて開催された東京大会には、62カ国の約1,300人が参加しました。世界的企業の経営陣や政府高官、中小企業経営者らが、リーダーシップ開発やネットワーキング、企業支援など多彩なテーマで話し合うことから「女性版ダボス会議」とも呼ばれています。

第1部　ＧＳＷ東京大会リレートーク

エア・アジア・フィリピン会長
マリアンヌ・オンティベロス氏

航空会社のCEO・会長の仕事でとても重要なものはコミュニケーション力です。社員が楽しむことは、お客様が楽しむことにつながるからです。私のコミュニケーション力は、３歳までに学んだことが基礎となっています。私は幼稚園で、あらゆる年齢や職業の大人たちから、人との付き合い方や言葉での伝え方を学んだのです。

大学在学中にはじめたテレビ番組制作を皮切りに、旅行業、貿易業などさまざまな仕事に携わり、世界でビジネスを学んできました。その後、フィリピンに戻り音楽業界で働いていた時、生涯のメンターとなる実業家トニー･フェルナンデス氏と出会いました。後に､彼から「格安航空会社を立ち上げないか」と声を掛けられましたが、その時は病気の治療に専念するため断念しました。５年後再び彼に誘われた時、今度は引き受けました。私は実業界からも離れていたし、航空業界の知識も経験もありませんでしたので、莫大な量の航空規則やマニュアルを読むことから始めました。しかし、情熱を持って取り組めば､道は必ず開けます｡手が届かないものはありません。

元ＩＢＭ副社長

マリリン・ジョンソン氏

私が生まれた1953年の翌年、アメリカで画期的な最高裁の判決があり、黒人の子どもが白人の子どもと同じ教育を受けることができるようになりました。ほとんどの児童が白人の小学校に通いましたが、周囲の環境は今までと全く異なるものでした。その中で、私は、「自分と違う宗教、文化、人の考え方を楽しんで学んでいこう。自分自身を制限するような固定観念にとらわれないようにしよう。長期的な目標を持とう」と決意しました。

大学院修了後、私は、人種や肌の色に関係なく能力のある人を雇い入れるというメッセージを打ち出していたIBMへ入社しました。IBMで世界を対象としたマーケット活動を行う中で、リーダーシップにおいて何が必要か、自分の影響力を高めるためにどうしたらよいのかを学びました。

35年間勤めたIBMを退職した現在、女性のビジネスを応援する会社を立ち上げています。常に学び、改善しようとする気持ちがあれば助けてくれる人が現れるはずです。私を成功に導いてくれているのは、改善しようという気持ち、立ち上がろうとする勇気です。

㈱西日本新聞社福岡本社
販売局企画開発部長

甲木 正子氏

私は、男女雇用機会均等法施行後の２期生として西日本新聞社に入社しましたが、同期で女性は私一人、出産も育児休業も私が社内初でした。働いていく中で、私には３回のターニングポイントがありました。一つ目は子どもが３歳の時、単身赴任で３年間東京勤務をしたことです。子どものことは不安でしたが、ここで断れば将来の女性進出に影響が出てしまうと思い決断しました。二つ目は韓国の釜山日報で働いたことです。45歳での未知の世界でしたが、自分の幅を広げるチャンスを与えていただきました。三つ目は、部長昇進で記者職から営業職へ転じた時です。当初は、自分の育った部署ではないことに失望もしましたが、今この部署で、ようやく会社全体が見えるようになりました。その時はどれがチャンスかターニングポイントなのかは分かりません。しかし、「私なんかできません。なぜ今なのですか」を問う前に、まずはチャレンジしてみることが大切です。何事もトライしてみることがターニングポイントになるのだと思っています。後輩女性のために道を切り開く、そして子どもに恥じない仕事をすることが私の信念です。

第2部　交流会＆ワークショップ

基調講演

㈱安川電機 代表取締役社長

小笠原 浩氏

かつてないスピードで多様な変化が起こっている今、グローバル化への対応と新たな市場の開拓、価値の創造が必須になっています。特に海外のビジネスが70％を占める安川電機では、多様な人材を積極的に活用する「ダイバーシティ経営の推進」が必要となっており、女性の活躍もその中の一つです。

ダイバーシティが進むと、平等ではなく公平が大切になり、自由の代わりに責任も明確になってきます。 世界の共通言語であるデータ（数値）を活用することで、国籍や性別などに関わらず公平に見ていきたいと考えています。

安川グループは、従業員の約60％が海外国籍です。日本国内の働き方が絶対ではなく、グローバルでの働き方のうちの一つでしかないという感覚を忘れてはなりません。

安川電機の活動としては、経営トップ自らがダイバーシティ推進の意義を社内で啓発する、ボトムアップで事業部単位、事業部横断のプロジェクトチームを発足する、多様な人材の育成・適正配置によるイノベーション創出などに取り組んでいます。そしてこれらが評価され、安川電機は、経済産業省主催の平成28年度「新・ダイバーシティ経営企業100選」を受賞しました。

ワークショップ

㈱クオリア 代表取締役

荒金 雅子氏

ダイバーシティや女性の活躍を推進する㈱クオリアの荒金氏をファシリテーターに、「明日のキャリアを見つけるために必要なターニングポイントを自ら作り出すために何が必要か」を考えるワークショップを開催しました。第一部で登壇した３名のゲストスピーカーとモデレーターも参加し、それぞれのテーブルで「キャリアのジレンマをどう乗り越えるか」などについて語り合いました。仕事を持つ女性はもちろん、これからのキャリアについて考える大学生や男性、管理職の方々など多くの方に積極的にご参加いただきました。

「行政官のためのジェンダー主流化政策2017」

（第１回）

KFAWは、独立行政法人国際協力機構九州国際センター（JICA九州）の委託を受け、毎年２回、開発途上国のジェンダー主流化を担当する中央政府及び地方政府の行政官を対象にした研修を実施しています。

2017年度は、５月31日（水）から６月30日（金）まで、ブータン、フィジー、ガーナ、コソボ、ラオス、ミャンマー、パレスチナの７カ国８名の行政官を対象に第１回の研修を行いました。

研修は、「講義」、「ワークショップ」、「視察」、「発表」で構成され、ジェンダー主流化のための概念、手法、理論などを包括的に学ぶプログラムで構成されています。

北九州市立大学 二宮副学長（後列右端）、田村教授（同左端）と

約１ヶ月の研修期間には、北九州市民との交流を通じて、異文化に対する理解を深め、ジェンダー問題について共有する「市民交流会」の時間があり、研修員が北九州市立大学を訪問し、大学生と交流しました。

まず、研修員は同大学の二宮副学長から招待を受け、茶道体験をし、抹茶を味わいました。次に、松尾学長を訪問し、地域への貢献、国際交流および環境分野の研究推進といった同大学の特色について説明を受けました。研修員からは、キャンパスの特徴や留学生数などについて活発な質問がありました。

その後、研修員は、大学生とのディスカッションに参加しました。

初めに、大学生が小中学校で体験した男女の違いや、大学に入って一人暮らしや自炊をしてみた感想、自分自身の将来などについて、ジェンダーの視点を交えたスピーチを行いました。男性漫画を読んでいて、周りの人から「なぜ男性漫画を読むのか？」と聞かれ、自分は他の女子と違うのかと考えた女子学生の体験や、中学生の時に女子は野球部に入部できなかったことなどが語られました。また、最近の日本の、男性保育士に女児の着替えや排せつを手伝わせたくないという保護者の意見をめぐり、活発なディスカッションが行われました。

北九州市立大学生とのディスカッション

さらには、大学に入って一人暮らしを始め、自炊をするようになった大学生たちが、栄養のバランスを考えながら食事を作ることの大変さや親のありがたみを知り、感謝の気持ちをスピーチしました。これに対してコソボの研修員からは、「自分には男女それぞれ子どもがいるが、自分自身も娘にだけ家事の手伝いをお願いしていた。子どもには将来自立して家庭を持っても、男女関係なく自炊できるようにならなくてはならない」といった感想が語られました。また、自分たちは勉強の合間にアルバイトをしているというスピーチに対して、ブータンの研修員は、「ブータンでは、学生時代にアルバイトをすることはほとんどない。就職して初めて社会を経験するので、日本の学生の方がアルバイトなどを通じ早く社会経験を身につけることができている」とのコメントがありました。

研修員たちにとって日本の大学生との交流を通じて自分自身を振り返るとともに、日本と自国の文化や社会の違いを感じることができた大変有意義な市民交流会となりました。

このほか、研修では、広島平和記念資料館訪問、北九州市内の保育園、小学校、農業施設や農家などを視察しました。

約１ヶ月間の研修で、日本を含め各国の制度や事情が異なるなか、研修員はお互いの国を尊重し、理解し合える関係を築くことができました。研修の最後には、自国でジェンダー主流化政策に取り組むための行動計画の発表会が行われ、研修の成果を今後の業務や活動に生かしていきたいと抱負を語っていました。

2017 / 18年度　KFAW客員研究員および研究テーマ紹介

KFAWでは、大学や研究機関の研究員を対象に毎年客員研究員を公募し、さまざまな分野の専門家によるジェンダーや女性に関する調査・研究を行っています。今年度決定した客員研究員は３組で、以下のテーマで、２年間調査研究を行います。

テレワークによる女性活躍についての研究

早稲田大学スマート社会技術融合研究機構客員主任研究員
井原　雄人
情報セキュリティ大学院大学情報セキュリティ研究科教授・学長補佐
湯淺　墾道
学校法人九州国際大学法人事務局次長
神力　潔司

多様な働き方の一つとして、決まった場所に通勤する必要がなく、子育てや介護等を自宅で行いながら働くことができるテレワークが注目されています。

本研究では、アジアとの連携や進出による企業が多数立地している北九州地域の企業のテレワークのニーズ、テレワークへの対応状況、導入にあたっての課題を、アンケートやヒアリングを通じて調査します。

一方、テレワークによりオフィス外で勤務することを希望する人材の側にも、勤務とプライベートな生活との区別がつきにくくなったり、カメラ等で勤務状況を管理されることにより、自宅内のプライバシー侵害の恐れがあったりするという問題があります。

調査結果をもとに、テレワークによる活性化効果や可能性を明らかにするとともに、プライバシーを侵害しない勤務者の管理方法、情報セキュリティを確保する方法を含め、円滑にテレワークを導入するための提言を行います。

日中における幼児教育とジェンダー―「教育家族」の中の父親役割―

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター　特任助教
磯部　香
大連外国語大学日本語学院　専任講師
黄　一峰

現在、東アジア地域一帯は、少子高齢（化）社会を迎えています。子育ては、人生で一度のライフイベントとなり、ますます価値が高まっています。約37年間続いた一人っ子政策の影響により、中国（の都市部）では、幼児教育（早期教育）の必要性が高まり、男女を問わず家族が一丸となり、乳幼児期からの幼児教育を行う「教育する家族」が出現し始めています。

本研究では、中国・大連市と日本の北九州市で、ヒアリングによる調査を行い、日中の幼児教育の事情、教育する家族、そのなかの父親の役割を比較対象とし、中国の幼児教育を体現している「教育する家族」の「父親」に対し、周囲（教師や母親）がどのような役割期待を抱いているのか、また父親自身が幼児教育を通してどのような子育て・教育規範を抱いているのかを解明します。

早期教育塾主催の国際児童オリンピック脳力コンテスト授賞式

持続可能な開発目標（SDGs）におけるジェンダー視点の主流化に関する研究

北九州サステナビリティ研究所研究員
織田　由紀子

国連ハイレベル政治フォーラム公式会議

「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」は、2015年国連で採択された、2030年を目標年とする約束文書です。「誰一人取り残さない」という理念のもと、経済、社会、環境分野の17の持続可能な開発目標（SDGs）が含まれています。ジェンダー平等および女性と少女のエンパワーメントもSDGsの目標の一つです。

本研究では、世界各国ではSDGsを使ってどのようにジェンダー視点の主流化を実現しようとしているか、SDGsの各目標におけるジェンダー視点に注目しながら、整理、分析します。そのための資料としては、国連の「持続可能な開発に関するハイレベル政治フォーラム」における各国政府の報告等を用います。

さらに、特徴的な国や事例を取り上げ、より詳細な調査に基づいてジェンダー主流化を促進する要因を考察します。日本および北九州市におけるSDGsの実施促進に貢献できればと思います。

2017年度　KFAW委託調査研究

市内の製造業における女性の活躍を推進するため、2015年度から「市内企業（製造業）の女性の活躍推進に関する調査」、「市内製造業における女性活躍推進を進めるためのプログラムの開発」を行ってきました。

2017年度は、引き続き、以下のテーマで調査研究を行います。

子育て中の女性が働きやすい製造現場とは

北九州市立大学　地域戦略研究所教授　吉村　英俊
㈱北九州経済研究所　上席研究員　林　一夫

製菓工場で働く女性たち

本研究は、北九州地域の製造業を対象に子育て中の女性を従業員として受け入れる場合の制度の創設、施設の改善、従業員の意識改革、行政への要望などをヒアリングを通じて調査します。

また、現在製造業で働いている子育て中の女性に、製造業で働くうえで便利な点や改善すべき点などの意識調査を行います。

さらに、製造業で働いている女性が多い他の都市を調査し、女性活躍を促進するための必要な要因を考察します。

調査結果をもとに、企業の取組みや子育て中の女性の意向を明らかにし、市内製造業に対して子育て中の女性が求める職場環境や、企業が求める女性活躍のあり方について提言を行います。

第61回

国連女性の地位委員会（CSW61）帰国報告会

日　時　2017年6月23日（金）18：30～20：00
場　所　北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
５階小セミナールーム
報告者　堀内光子（KFAW理事長）
岡坂明日花さん（BPW・CSW61インターン派遣生）
人　数　53名

堀内光子（KFAW理事長）の報告

2017年３月13日から24日、ニューヨークで開催された第61回国連女性の地位委員会（CSW61）に参加しました。参加者総数はおよそ8,600人。162カ国から89人の大臣が集結したほか、138カ国の580のNGO団体から3,900人を超える市民の参加もありました。本会議と並行してサイドイベントやパラレルイベントも数多く行われました。また、24歳以下の若者対象の第２回ユースフォーラムが昨年から引き続き開催され、世界各国から約750人の若者が参加し、さまざまな議論をし、ユース宣言が出されました。

今年のCSWは、新しい国連事務総長アントニオ・グレーテス氏の下で開催された初のCSWです。グレーテス氏はジェンダー平等に理解が深く、重要な地位に女性を任命するなど女性のエンパワーメントに熱心に取り組んでおり、今年のCSWにも事務総長自ら出席し、史上初めてNGOとのタウンミーティングも開催しました。

優先テーマは「変わりゆく仕事の世界での女性の経済的エンパワーメント」、レビューテーマは、CSW58で合意結論に至った「女性・少女のミレニアム開発目標（MDGs）実施における課題と達成」、そしてフォーカスエリアは「先住民女性のエンパワーメント」でした。

開会式、事務総長のあいさつに続き、各国代表の演説（一般討議）があり、優先テーマに沿って、①男女賃金格差、②仕事の世界を変える技術、③インフォーマル・非典型労働、④すべての人の完全・生産的雇用とディーセントワーク（働きがいのある公正な労働）の４つのテーマで閣僚級円卓会議が開催されました。その後、CSW61の成果として、①規範、法的枠組みの強化、②教育、訓練、技能開発の強化、③女性の経済的エンパワーメントのための経済・社会政策の実施等７つの合意結論、パレスチナ女性の状況及びその支援等２つの決議が採択されました。

国連女性の地位委員会（CSW）に参加して

BPW・CSW61インターン派遣生
福岡女子大学４年生
岡坂　明日花 さん

CSW61は私にとって、初めて国際社会という場で世界を通してジェンダー平等について考える機会となりました。CSWではさまざまなイベントに参加しましたが、一番印象に残ったのはアイスランドとHeForShe（UN Womenによるジェンダー平等のためのキャンペーン）が主催したイベントでした。このイベントでは、アイスランドが実際に行っている「方法」として、男性同士がジェンダーについて学ぶ場をどのように提供するべきであるかということを紹介していました。これは、アイスランドがジェンダー平等第１位の国として世界を引っ張っていく立場にいるのだということを理解した上での活動ではないでしょうか。今回、国連という場に参加したことによって、国際社会における各国の役割や期待されていることを少なからず見ることができました。

それでは、日本は世界から何を期待されているのでしょうか。私は、日本はジェンダー平等に関して大変遅れており、他国から学ぶべきことが数多くあると思います。しかし、CSWを通して、多くの発展途上国の方が日本のイベントに参加し、日本の技術や活動をどう取り込んでいくかという姿勢であったことに気がつきました。先進国として日本を手本にしている国は多く、日本がジェンダー問題に取り組むことによる世界への影響力は大きいのではないでしょうか。だからこそ、日本はジェンダー平等への取り組みにおいても先陣を切っていく立場にあることを自覚し、今後とも活動していく必要があるのだと思います。

私は、今回、CSWに参加して、広い世界に目を向けることによって、ジェンダーギャップ指数等のデータでは見えてこない事実や現状を知ることができました。この貴重な体験をしっかりと生かし、多くの人に伝えていくことが私の責任であると感じています。

国際理解セミナー

「多様性の国・インドネシア講演会」

日　時　2017年8月27日（日）14：00～16：00
場　所　北九州市立男女共同参画センター・ムーブ　5階小セミナールーム
講　師　ヘルピン・ドゥイジャヤンティさん　**参加者**　40名

インドネシアのデポック市出身で、福岡で子育て中のヘルピンさんをお招きし、インドネシアの社会や文化、男女の生き方について、ご自身の体験談や日本との比較を交えながらお話しいただきました。

インドネシアは、17,000ほどの島に300以上もの多様な人種、民族が暮らす多民族国家です。それぞれが異なる言語を使用しており、肌の色や顔、信仰する宗教や教育、経済や地域開発も異なります。私が日本に来た時に驚いたのは、日本ではみんなが同じ言葉を話し、同じ顔をしていることでした。このような多様性の中、インドネシア人は、学校等では共通語のインドネシア語を話しますが、家庭ではそれぞれの言語を話します。私もイスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教などさまざまな宗教を信仰する友達がいましたが、インドネシアの国是「多様性の中の統一」にもあるように、みんながそれぞれを受け入れ、尊重して暮らしています。

インドネシアでは、宗教は毎日の生活に溶け込んでいます。87％のインドネシア人がイスラム教を信仰し、イスラムの価値観に基づいた生活をしています。１日５回行う礼拝は、心と体をきれいにするためのもので、モスクはデパートや駅、会社の中にもあります。

イスラム教の教えでは、近所やお年寄りを大切にするということはとても大事なことです。私の住んでいた地域には40世帯ほどの家族があったのですが、皆が、すべての人の名前と何をしている人なのかを知っていました。誰かが助けが必要な時は、皆が助けに来ます。

また、結婚はイスラム教が推奨する良いことの一つであり、インドネシアの人々は家族を中心にした暮らしを送っています。父親はリーダーとして家族を養い、母親は神への信仰を持つ子どもたちを育て世話をする役割があります。イスラム教では、「天国は母親の足の裏にある」といわれており、子どもは親を尊敬し感謝することが奨励されています。私は現在結婚して、３人の子供を育てていますが、私の夫は今でも実家のお母さんへの送金を続けています。これはインドネシアでは特別なことではありません。

インドネシアの女性は、教育、法律、政治において男性と同じ機会を持っており、教師、医者、従業員、実業家、官僚、警官などさまざまな分野で働いています。女性が働いている間、インドネシアの家庭ではメイドやベビー・シッターなどのホームアシスタントが子供の世話をしています。大体の家庭にはホームアシスタントがいますし、最近では託児所を利用する女性も増えています。もちろん近所に住む両親も助けてくれます。

このようなサポートと高い教育を受け、マネージャーやCEOとして活躍する女性もいます。最近では、スラバヤ市長のリスマ氏や海兵相のスシ氏のように、特に高い職位で活躍する女性も見られるようになりました。

KFAW第27期 海外通信員がスタート！

KFAWでは、アジア・太平洋地域を中心とした海外との幅広いネットワークを形成するために、1991年から海外通信員制度を設けています。これまでの通信員は41カ国延べ298人となり、今期は５カ国６名の皆さんに通信員をお願いすることとなりました。このネットワークを通して、各国から最新の情報をお伝えします。各通信員の詳しい紹介は**ホームページ（http://www.kfaw.or.jp/correspondents/）**からご覧になれます。

スリランカ
ニシャン・ウィジェトゥンゲ さん
建築家、英国・リバプール大学名誉研究員

フィリピン
アリーサ・フニオ さん
オランダ・社会科学大学院大学修士課程在籍中

ウガンダ
ハディジャ・ナキムエロ さん
イスラム大学講師

ネパール
ヨヤーナ・ポッカレル さん
ヨガトレーナー、ファシリテーター

インドネシア
アストリ・ヒダイティ さん
アイルランガ大学修士課程在籍中、フリーライター

インドネシア
マリスナ・ユリアンティ さん
ジェンダー専門家

第27期 海外通信員リポート

単なる補佐役ではなく運営の主体として
―インドネシアのカカオ農園で働く女性たちから得た教訓―

マリスナ・ユリアンティ（インドネシア）

Profile

ジェンダー専門家としてミレニアム挑戦会計（MCA）によるグリーン・プロスパリティ・プロジェクトをサポート。低炭素開発イニシアティブにジェンダーの視点を組み入れるために、持続可能な農業と天然資源管理の推進、新たな再生可能エネルギー源の開発による化石燃料への依存軽減などを通じた農業生産性の向上及び家庭の暮らし向きの改善に取り組んでいる。

暑さの厳しい木曜日の午後、カカオの木々の緑に囲まれた場所で、農園の男女が集まって土壌pH（水素イオン濃度）の管理法と害虫防除についての講習会に熱心に耳を傾けています。「何か質問はありませんか、男性の皆さん？」とファシリテーターが質問を募ります。一人の男性が手を挙げたのを皮切りに、ディスカッションが始まりました。その間ずっと女性たちは後ろの方で黙って腰を下ろしていました。彼女たちの存在は、男性たちとは異なり影が薄く感じられました。男性が人数で勝っているからなのでしょうか？　それとも「自分たちは場違いだ」と感じているからなのでしょうか？　その答えは、いまだに分かりません。

ジェンダー平等の考え方は、生活のあらゆる分野において、女性と男性が等しく参画し関与することに重きを置くものです。開発に関しては、計画から実施まで全ての段階において女性と男性の双方が関わっていく必要があります。そうすることで、女性と男性が平等に開発をコントロールし、その恩恵を享受できるようになるからです。また最も重要な対象として、社会から取り残され周縁化されている女性や女児に焦点が当てられています。女性のエンパワーメント化を図り、女性があらゆることに関与を強めるよう推進していくことで、ジェンダー平等の実現に近づきます。数多くの政策やプログラムが、様々な領域における女性の参加率を30％以上に設定するようになっています。それは、政治における国会議員の割合から研修における女性の参加率に至るまで、実にさまざまな分野で見られます。あのカカオ農園で行われた、ちょっとしたディスカッションも然りです。しかし、「出席」や「参加」とは実際に何を意味しているのでしょうか？果たしてそれが本当に、女性がより多くの機会を得たり、資産を管理したりすることに寄与するのでしょうか？

あの農園でレクチャーを受けていたグループは、カカオ豆の生産量と品質を高めるために国際機関による支援とキャパシティ・ビルディングを受けています。グループの女性の大半は、農園で働く男性の妻や娘です。私たちが彼女たちと再び会った時は、女性だけの集まりだったこともあり、より活発で元気に満ちている様でした。今ではカカオについての知識も増え、生産するカカオ豆の品質が良くなったおかげで、家計収入が二倍になったと話してくれました。さらに、女性たちの農園管理能力が上がったために手伝いの人員を雇う必要が無くなり、家計からその費用を削減することができたということです。またそれだけではなく、家庭内での男女の関係にも変化が見られるようになったということです。農園について何らかの判断をしなければならない場合、女性たちが夫から相談を受けるようになったり、夫婦間での話し合いが以前よりも増えたりしているそうです。

このような予想以上の変化には驚かされます。研修に参加していた女性たちは、都合で来られない夫や父親の代理として参加していたもので、農園では単なる手伝いとして扱われる存在でした。そのことが講習会での女性の扱いに反映され、ファシリテーターの意識が世帯主であり土地と農園の唯一の管理者としての男性の方に集中してしまい、女性たちは二流の農園労働者として後方の席に取り残されていたのです。このようなステレオタイプ化は、女性たちの自分自身に対する捉え方にも明らかに影響を与えていました。農作業における労働分担のデータを見ると、農園での作業のかなりの部分を担っているのは女性なのだということが分かります。それでも、彼女たちは、「夫が最も農園に貢献している」と答えます。これに対し、「自分はただの手伝い」というのが、決まり文句になっているのです。

農業、経済、および主な開発セクターにおける女性の役割や貢献が十分に認められていないという問題は、実際に完全には解決していません。インドネシアにおける関連法や規制には、いまだにジェンダーの認識が無いものや、場合によってはジェンダーに基づく偏見を含むものまであります。しかし2013年にインドネシア中央統計庁が行った調査によると、農業従事者のうち女性が23％を占め、生産年齢の女性の55％がインドネシアにおける労働力に参加しています。このように、統計上では女性の活躍が明らかであるにもかかわらず、現実には女性の存在はあまり認められていないのです。どれだけ懸命に働いたとしても、女性たちは単なる補佐役という扱いしか受けないのです。家計にどれだけ貢献したとしても経済改革の担い手としての女性の貢献は、これまで十分に認められることはありませんでした。

ここから得られる唯一の教訓は、女性が参加し積極的に貢献すれば、好ましい変化が生まれる、という紛れもない事実でしょう。政府や社会全体で、女性がその存在感を高められるだけの余地を与える必要があるのです。また、女性の労働力参加率などの数的な調査を行うだけではなく、

ディスカッションで声を挙げるカカオ農園の女性たち

ディスカッションの中や建設的な変化をもたらす上で女性が果たす貢献や役割など、質的な記録を行っていくことも必要です。これに加え、女性に対してさらなる参加を促すための取り組みも求められます。例えば、会議などで女性の存在に目を向け、女性だけを対象とした研修を行い、女性の時間や都合に合わせた活動を行うなど、さまざまな試みが考えられます。そうすることで、女性は自分たちの参加が求められているばかりでなく、それが必要不可欠なことなのだという意識が高まるのです。そのうち、カカオ農園の女性たちも胸を張って最前列に座り、誇りを持って挙手する日が来ることを願うばかりです。そして、勇気を出してこう言って欲しいのです。「私たちはただの手伝いではありません。農園運営の主体として貢献しているのです。だから、私たちの存在を認めてください」と。

第27期 海外通信員リポート

ウガンダにおける女子児童の家庭環境、月経衛生管理、および教育について

ハディジャ・ナキムエロ（ウガンダ）

Profile

ウガンダで唯一の女子キャンパスがあるイスラム大学人文社会学部のコーディネーター。
また、女性のエンパワーメント、リーダーシップ・トレーニング、ジェンダーに基づく暴力、平和と安全などに関する活動や少女や女性たちに職業や技能訓練を行う女性センターの設立を主導してきた。現在、スーダンのアファッド女子大学の博士課程において、持続可能な農村開発について学んでいる。

ウガンダでは2007年以降、初等教育と中等教育の完全普及が実施されており、国内全ての学齢児童・生徒に義務教育を受けさせることになっています。持続可能な開発のための2030アジェンダでは、教育が目標項目の一つとして掲げられています。全部で17項目ある持続可能な開発目標のうち、４番目の項目である「万人への質の高い教育と生涯学習」という目標は、政府から地域コミュニティにいたるまであらゆる関係者に歓迎されています。ウガンダ政府はかなり以前から、学校設備の整備、教科書などの教材の支給、職員の給与の支払いに加え、公立の初等学校と中等学校の全ての男女生徒に対して授業料の無償化を行ってきました。

しかし教育そのものの目標はさておき、全ての女子生徒と男子生徒が公正で質の高い教育を無償で受け、初等・中等教育の課程を修了することにより、その学習の成果が効率的に得られる、といった目的はこの国では達成できないかもしれません。特に農村部においてその達成が危ぶまれるだけでなく、思春期の女子生徒の達成も難しい状況です。なぜなら、月経の衛生的な管理という問題が、彼女たちの前に立ちはだかっているからです。

農村部の人々は、教育が「荒廃してしまっている」と思っています。質の高い教育を施すために必要なものは、全て欠落した状態が続いているからです。農村部の学校には教室が１～２部屋しかなく、生徒たちの大半が木陰で学んでいます。また、勤務を希望する教員がいないため、教員の数も足りていません。政府から教員に支払われる給与はわずかなもので、それを補うための親からの寄付金も集まらないからです。このような農村部の学校では、教員のための宿舎や交通手段の提供も行われていません。

こうした教育環境は、特に女子生徒にとってより厳しいのが現状です。このような農村部の学校の多くではラトリンと呼ばれる落とし込み式トイレの数が足りておらず、あったとしてもひどい状態のものです。また、このトイレは男女共用で、プライバシーを守ることができません。生理中の女子生徒にとってこの状況は非常に辛く、生理が来ると学校を休んだり、それを繰り返すために結果として中退したりする女子生徒も少なくありません。これに加え、多くの学校では手洗いの施設も無く、敷地内に水くみ場さえありません。

月経時の衛生管理の問題が深刻化している原因の一つに、親からのサポートが十分ではないという点があります。この国では文化的に生理についての話をすることがタブー視されているため、親から生理時の対処の仕方を教わらないケースもあるのです。また、貧しくてナプキンを入手できないため、不衛生な物で代用したり、経血で服を汚してしまって恥ずかしい思いをするぐらいなら家から出ない方が良いと考える女子生徒もいます。さらに、男子生徒から生理についてからかわれ、それが原因で学校に行けなくなる場合もあります。多くの男子生徒が生理のことで女子生徒を笑うため、女子生徒は学校に通いたくなくなるのです。

この状況を食い止めるために、政府系・非政府系機関が月経衛生管理について啓発活動を行っており、その対象は当事者である女子生徒にとどまらず、男子生徒、両親、学校管理者、宗教指導者、地域コミュニティにまで及びます。ウガンダの大統領は月経衛生管理の改善に向けて熱心に取り組む必要があります。そのためには、初等・中等学校の設備を充実させ、思春期の女子生徒に生理用ナプキンを支給することで、彼女たちが学校を休んだり中退したりすることなく、質の高い教育や生涯学習を受けられるよう環境を整えることが強く求められているのです。

自分たちで作った洗って再利用できる生理用布ナプキンと携帯用バッグを見せる初等学校の生徒たち

ISSN 0918-8266

夢スケッチ
～君だけの夢を描こう～

日　時　2017年7月8日（土）・8月19日（土）　16：00～18：15（全2回）
場　所　北九州市立ユースステーション　**参加者**　高校生（公募）55名
企画運営　北九州市立大学地域創生学群　眞鍋ゼミ学生

KFAWは2016年度から八幡西生涯学習総合センターと共同で、高校生のためのキャリア形成セミナーを開催しています。今年度は、北九州市立大学と北九州市立ユースステーションの協力をいただき、大学生が高校生と一緒に夢について考える時間を持ちました。

1回目　7月8日（土）
- 色んなゲームで仲間づくりをしよう
- 自己分析シートで、自分について知ろう
- 自分の“夢プラン”を作成しよう

2回目　8月19日（土）
- アイデアツリーづくり
- 自分の夢について話そう
- ロールモデルの講師の話を聞こう

夢スケッチを企画・運営して

北九州市立大学
地域創生学群 3年生
尾崎 奈緒子

皆さんは高校生の時、どのような夢をもっていましたか？　パティシエ、美容師、消防士、警察官、看護師…さまざまな職業に憧れを抱き、たくさんの夢をもっていたと思います。

それでは、今の高校生にどんな職業が人気なのかご存知ですか？　答えは公務員です。その理由は安定しているから。全員が公務員になりたいというわけではありませんが、憧れではなく、安定志向の高校生が多くなっているのです。そこで、いまの高校生は将来に夢や希望を持っていないのではないかと考えた私たちは、「夢について考えるきっかけをつくる」ために、高校生を対象としたワークショップを行いました。

参加してくれた高校生は素敵な夢を持った人や、夢がまだ見つかっていない人、夢はあるけど人に話すのが恥ずかしいと思っている人など、さまざまな人がいました。私も高校生の時に夢が見つからず、大学に入ってから探してみようと考えて大学に入ったので、高校生には今のうちからやりたいことを見つけてもらいたいなと思いました。

今回のワークショップは2日間行い、1日目はそれぞれの未来を想像してもらいました。27歳で素敵な人と結婚したい！　60歳で世界旅行をしたい！　など、やってみたいことをたくさん書いてもらいました。2日目はゲスト講師をお呼びして、今の職業についてのお話や、目指そうと思ったきっかけ、今現在での夢などをロールモデルとして、そして人生の先輩としてたくさん話していただきました。その話が心に響いたのか、プログラム終了後には高校生が自ら講師のもとに行き、アドバイスをいただいている様子もうかがえました。

今回のワークショップを開催するにあたって、どうすれば高校生が夢について考えてくれるだろうか、私たちに心を開いて夢を語ってくれるだろうか、とたくさん悩みましたが、高校生に一番近い存在である私たちが一緒に夢について考えることで、少しでも参加してくれた高校生の人生の手助けとなれたのならうれしいです。ありがとうございました。

ゲストスピーカー　トークセッション

㈱タカギ
人事課兼研究所準備室
原 大道 さん

高校生時代はこれといった目標もなく、勉強、部活、バンド活動、バイトなど自分が面白いと思うことばかりしていました。3年生のとき、たまたま一冊の本、スーザン・ジョージの「なぜ世界の半分が飢えるのか」に出会い、人生の目標として人を飢えから解放するような仕事がしたいと思いました。3年生の夏から農学部進学に向けて動き出し、第一志望の大学に入ったものの「自分一人でできることは本当に小さい、自分ががんばらなくてもいい」と思い無気力でした。大学3年生のとき、先輩と先生に言われた言葉があります。「人一人の力は小さいが、小さいことの積み重ねが今の社会を作っているし、一人の力がなければ何も生まれない。」初めて人生を舐めていたことに気付き、そこから死に物狂いで勉強して、環境工学という新たな分野で、別の大学の大学院に進みました。目標を持って取り組む、夢を持って取り組むことって本当に大事なことだと痛感しました。世界から飢えをなくすことが私の夢です。そのためにはいろいろなアプローチがありますが、自分がやりたかったのは「水」です。平均寿命の短い国に共通しているのは水が汚いことです。水を改善していくことが自分の夢のゴールです。

㈱アジュレール
代表取締役
杉原 美保 さん

父親が厳しい人で、虐待児で育ちました。学校以外に外に出してもらえず、友だちもおらず、唯一安心できる存在が学校の先生でした。

子どもができて、離婚も経験しました。子育てに疲れて、ある日アロマサロンへ行きました。マッサージを受けながら聞いたセラピストの一言「杉原さんもこんな仕事が似合うと思いますよ。」これが気付くきっかけになりました。勉強も嫌いじゃないし、小児喘息でずっと病院通いをしていたので、健康に対しての意識が高かったのです。どうせなら癒しのアロマではなく、医療のアロマを学んでみようと決意しました。夢を持つタイミングは人それぞれだと思います。焦って自分らしくないものをつかむよりは今、好きだなと思えることに向き合って、そこから掘り下げていくのです。

私の夢の一つは、義務教育のカリキュラムに健康を守る知恵、病気にならない知恵を入れること。もう一つは、若い世代に夢を与えられるような話をしていくことです。一回きりの人生、夢を持って挑戦をしてほしいです。それには「未来年表」がおすすめです。自分がなりたいものがあり、そのためにスキルが必要なら学び、お金の計画を立てて、ここならいけるというタイミングを書き込みます。期限は必ず決めます。なりたいという強い思いと計画性があったら絶対になれます。

公益財団法人
アジア女性交流・研究フォーラム
KITAKYUSHU FORUM ON ASIAN WOMEN
〒803-0814　北九州市小倉北区大手町11-4　北九州市大手町ビル3F
TEL（093）583－3434　FAX（093）583－5195
E-mail : kfaw@kfaw.or.jp　URL:http : //www.kfaw.or.jp
facebook : http://www.facebook.com/kfaw.or.jp

＊当財団は、北九州市立男女共同参画センター・ムーブ、北九州市立東部勤労婦人センター・レディスもじ、北九州市立西部勤労婦人センター・レディスやはたの指定管理者です。

（公財）アジア女性交流・研究フォーラムは、1990年10月に北九州市の「ふるさと創生事業」で設立された市の外郭団体です。アジア地域の女性の地位向上と連帯・発展を目指して「まなびあう」「ふれあう」「たすけあう」をテーマに事業活動を展開しています。